

ヨエル書

第一章一ペトエルの子ヨエルに臨めるエホバの言二老たる人よ汝ら是を聴けすべて此地に住む者汝ら耳を傾けよ汝らの世あるは汝らの先祖の世にも是のごとき事ありしや三汝ら之を子に語り子はまた之をその子に語りその子之を後の代に語りつたへよ四啞くらふ蝗虫の遣せる者は群ある蝗虫のくらふ所となりその遣せる者はなめつくすおほねむしのくらふ所となりその遣せる者は喫ほろぼす蝗虫の食ふ所となれり五酔る者よ汝ら目を醒して泣けすべて酒をのむ者よ哭きさけべあたらしき酒なんぢらの口に絶えたればなり六それはことなる民わが國に攻よすればなりその勢ひ強くその數はかられずその齒は獅子の齒のごとくその牙は牝獅子の牙のごとし七彼等わが葡萄の樹を荒しわが無花果の樹を折りその皮をはぎはだかにして之を棄つその枝白くなれり八汝ら哀哭かなしめ貞女その若かりしときの夫のゆゑに麻布を腰にまとひて哀哭かなしむがごとくせよ九素祭灌祭ともにエホバの家に絶えエホバに事ふる祭司等哀傷をなす一〇田は荒地は哀傷む是穀物荒はて新しき酒つき油たえんとすればなり一一こむぎ大麥の故をもて農夫羞ぢよ葡萄をつくり哭けよ田の禾稼うせはてたればなり一二葡萄樹は枯れ無花果樹は萎れ石榴椰子林檎および野の諸の樹は凋みたり是をもて世の人の喜樂かれうせぬ三祭司よ汝ら麻布を腰にまとひてな

きかなしめ祭壇に事ふる者よ汝らなきさけべ神に事ふる者よなんぢら來り麻布をまとひて夜をすこせ其は素祭も灌祭も汝らの神の家に入ことあらざればなり一四汝ら斷食を定め集會を設け長老等を集め國の居民をこごとく汝らの神エホバの家に集めエホバにむかひて號呼れよ一五ああその日は禍なるかなエホバの日近く暴風のごとくに全能者より來らん一六我がまのあたりに食物絶えしにあらすや我らの神の家に歡喜と快樂絶えしにあらすや一七種は土の下に朽ち倉は壞れ廩は圯るそは穀物ほろぼされたればなり一八いかに畜獸は哀み鳴くや牛の群は亂れ迷ふ草なければなり羊の群もまた死喪ん一九エホバよ我なんぢに向ひて呼はらん荒野の諸の草は火にて焼け野の諸の樹は火焰にてやけつくればなり二〇野の獸もまた汝にむかひて呼はらん其は水の流涸はて荒野の草火にてやけつくればなり

第二章一汝らシオンにて喇叭を吹け我聖山にて音たかく之を吹鳴せ國の民みな慄ひわななかんそはエホバの日きたらんとすればなりすでに近づけり二この日は黒くをぐらき日雲むらがるまぐらき日にしてしののめの山々にたなびくが如し數おほく勢さかんなる民むれいたらんかかる者はいにしへよりありしことなく後の代々の年にもあることなかるべし三火彼らの前を焚き火焰かれらの後にもゆその過ぎる前は地エデンのごとくその過ぎしのは荒はてたる野の如し此をのがれうるもの一としてあることなし四彼らの状は馬のかたちのごとく其馳あ

りくことは軍馬のごとし五その山の嶺にとびをどる音は車の轟
聲がごとしまた火の稗株をやくおとの如くしてその様強き民
の行伍をたてて戦陣にのぞむに似たり六そのむかふところ諸民
戦慄きその面みな色を失ふ七彼らは勇士の如くに趨あるき軍人
のごとくに石垣に攀のぼる彼ら各おのが道を進みゆきてその
列を亂さず八彼ら互に推あはず各その道にしたがひて進み行く
彼らは刃に觸るとも身を害はず九彼らは匡をかけめぐり石垣の
上に奔り家に攀登り盜賊のごとくに窓より入る一〇そのむかふ
ところ地ゆるぎ天震ひ日月も暗くなり星その光明を失ふ二
エホバその軍勢の前にて聲をあげたまふ其軍旅はなほだ大な
ればなり其言を爲とぐる者は強しエホバの日は大にして甚だ
畏るべきが故に誰かこれに耐ふることを得んや三然どエホバ
言たまふ今にても汝ら斷食と哭泣と悲哀とをなし心をつくし
て我に歸れ四汝ら衣を裂かずして心を裂き汝等の神エホバに
歸るべし彼は恩恵あり憐憫ありかつ怒ることゆるく愛憐大に
して災害をなすを悔いたまふなり四誰か彼のあるひは立歸り
悔て祝福をその後にとめのこし汝らをして素祭と灌祭とをな
んぢらの神エホバにささげしめ給はじと知んや五汝らシオン
にて喇叭を吹きならし斷食を定め公會をよびつどへ六民を集
めその會を潔くし老たる人をあつめ孩童と乳哺子を集め新郎を
その室より呼いだし新婦をその密室より呼いだせ七而してエ
ホバに事ふる祭司等は廊と祭壇の間にて泣て言へエホバよ汝

の民を赦したまへ汝の産業を恥辱しめらるるに任せ之を
異邦人に治めさする勿れ何ぞ異邦人をして彼らの神は何處に
あると言しむべけんや八然せばエホバ己の地にために嫉妬を
起しその民を憐みたまはん九エホバ應へてその民に言たまは
ん視よ我穀物とあたらしき酒と油を汝におくる汝ら之に飽ん
我なんぢらをして重ねて異邦人の中に恥辱を蒙らしめじ一〇我
北よりきたる軍を遠く汝らより離れしめつるほひなき荒地に逐
やらん其前軍を東の海にその後軍を西の海に入れんその
臭味立ちその惡臭騰らんは大なる事を爲たるに因る二地
よ懼るる勿れ喜び樂しめエホバ大なる事を行ひたまふなり三
野の獸よ懼るる勿れあれ野の牧草はもえいで樹は果を結び
無花果樹葡萄樹はその力をめざすなり四シオンの子等よ汝ら
の神エホバによりて樂め喜べエホバは秋の雨を適當なんぢら
に賜ひまた前のごとく秋の雨と春の雨とを汝らの上に降せたま
ふ四打場には穀物盈ち糞にはあたらしき酒と油溢れん五我が
汝らに遣しし大軍すなはち群ある蝗なめつくす蝗喫ほるほす
蝗噬くらふ蝗の触あらせる年を我汝らに賠はん六汝らは食ひ
食ひて飽きよのつねならずなんぢらを待ひたまひし汝らの神
エホバの名をほめ頌へん我民はとこしへに辱しめらるること
なかるべし七かくて汝らはイスラエルの中に我が居るを知り
汝らの神エホバは我のみにて外に無きことを知らん我民は
永遠に辱かしめらるることなかるべし八その後われ吾靈を

一切の人に注がん汝らの男子女子は預言せん汝らの老たる人は夢を見汝らの少き人は異象を見ん二九その日我またわが靈を僕婢に注がん三〇また天と地に徴證を顯さん即ち血あり火あり煙の柱あるべし三一エホバの大なる畏るべき日の來らん前に日は暗く月は血に變らん三二凡てエホバの名を顯ぶ者は救はるべしそはエホバの宣ひし如くシオンの山とエルサレムとに救はれし者あるべければなり其遣れる者の中にエホバの召し給へるものあらん

第三章一觀よ我ユダとエルサレムの俘囚人を歸さんその日その時二萬國の民を集め之を携へてヨシヤパテの谷にくだりかしこにて我民我ゆづりの産なるイスラエルのために彼らをさばかん彼らこれを國々に散してその地を分ち取りたればなり三彼らは籤をひきて我民を取り童子を娼妓に換へ童女を賣り酒に換て飲めり四ツ口、シドンよベリシテのすべての國よ汝ら我と何のかかはりあらんや汝ら我がなししことに返をなさんとするや若し我に返報をなさんとならば我忽ち迅速に汝らがなししことをもてその首に歸らしめん五是は汝らは我の金銀を取り我のしたふべき寶を汝らの宮にたづさへゆき六またユダの人とエルサレムの人をギリシヤ人に賣りてその本國より遠く離らせたればなり七視よ我かられを起して汝らが賣たる處より出し汝らがなししことをもてその首にかへらしめん八我はなんぢらの男子女子をユダの人の手に賣り彼らは之を遠き民なるシバ人に賣ら

んエホバこれを言ふ九もろもろの國に宣つたへよ戰爭の準備を爲し勇士をばげまし軍人をことごとくちかより來らしめよ一〇汝等の鋤を劍に打かへ汝らの鎌を鎗に打かへよ弱き者も我は強しと言へ二四周の國々の民よ汝ら急ぎ上りて集れエホバよ汝の勇士をかしこに降したまへ三國々の民よ起て上りヨシヤパテの谷に至れ彼處に我座をしめて四周の國々の民をことごとく鞠かん三鎌をいれよ穀物は熟せり來り踏めよ酒樽は盈ち壘は溢る彼らの惡大なればなりと四かまびすしきかな無數の民審判の谷にありてかまびすしエホバの日審判の谷に近くが故なり二五日も月も暗くなり星その光明を失ふ二六エホバ、シオンよりよびとどろかしエルサレムより聲をはなち天地を震ひうごかしたまふ然れどエホバはその民の避所イスラエルの子孫の城となりたまはん七かくて汝ら我はエホバ汝等の神にして我聖山シオンに住むことをしるべしエルサレムは聖き所となり他國の人は重ねてその中をかよふまじ八その日山にあたらしき酒滴り岡に乳流れユダのもろもろの河に水流れエホバの家より泉水流れいでてシツテムの谷に灌がん九エジプトは荒すたれエドムは荒野とならん是はかれらユダの子孫を虐げ辜なき者の血をその國に流したればなり一〇されどユダは永久にすまひエルサレムは世々に保たん二我さきにはかれらが流しし血の罪を報いざりしが今はこれをむくいんエホバ、シオンに住みたまはん